



## 江乃島紀行

註釈

### 第一日 江戸ハ丁堀へ神奈川宿

- ・思おもいわたる：思おもい続ける

- ・つれど：かれど：

- ・ことわざ：行為、仕事。

- ・じざく：忙いそげ

鎌倉鶴つるが岡、江の島詠うたひの事、あまた  
としおもひわたりつねど、向むかれとせの  
ことわざことわざしげく、また道の程みちもやゝ遠  
ければ、心にわまかせざりしを、ことし  
ばかりは向むかのやせある事こともなくて、卯月  
中の八日しののぬに出たつ。空そらのカシキかしき  
ことしづかなり。

祈ねが事ごとの歳としをかさねて夏衣なつじふき  
けらおもひ立たびだすて夏衣なつじふき  
高輪たかはにてしばし休やすらる。東海寺・海安寺

から「立たつ」などに掛かる。

・海安寺：海晏寺

の紅葉、過ゆにし秋見あきみしおもかげなど  
このばれて、青葉しげれるせいはれても見みま  
ほしけれど、行先のこぞぐまこぞぐまに、立ち  
ようす、わめす・あらあらいが崎さきをむ打うち過よて、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡ふなわしも  
ことやすいかにここそ、川崎の萬年屋まんねんやと  
いくに立たつよりて、廻まわの支度しどうなどと入いのく、  
神奈川の井柵屋いぢやにやどりぬ。それより

むかひなる権現山ごんげんさんにのぼり、海面うみはなむかに  
回まわき、宿しゆく、通とおし

・神奈川宿井柵屋いぢやのことか

野毛山教の御事は又金沢が御つて  
金沢へ向ひたる事そのもので本來  
金沢へ又あくまでも田畠よりの事也  
船を雇ひ同様かと云ふ事の御事

第一日 神奈川～関～能見台～金沢

十九日晴夜の利一晩既而行船をすと  
三井も甚都の旅館をとく浅間の山社  
車の用事五時の人荒木の下りて金沢  
御食事の金銀の下りて金沢  
之る三湯より御出でい山口のあらす  
處とぞ能見堂ふらひてあるの所に  
京急電鉄の跡の難波一里の所に  
居勢は金馬、京急電鉄の跡の難波  
やうやく御身をすゝめておひそめのね  
大樹あつむつて御禪師の御所  
東の御事とて八京の名とて近多き  
おのれの御事の頃同面神樂の侍奉事  
多は御事とて坐の御事とておもひ  
亭の御事とておもひ御所の御事とて八京の  
而して二度とてを免ての御事とて御事

辺

館

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆふげの  
けぶりもほんくたちのぼり、うしろ  
ざまに見かへれば、田畠もまた一つの氣色

烟

返

傾

なり。やゝ田せ西にかたゞかば元のやどりに帰る。

## 第一日 神奈川へ関へ能見台へ金沢

十九日晴、辰の刻近きいふ、此やどりを宿  
立ち出、台の茶店を過て、浅間の御社に詣  
まいづ。富士の人穴といへるもめぐらし。  
程が谷より金沢の道、まがりへて関と

こへる立場にさしかかる、山坂のけはしあ  
道を過て能見堂にいたりぬ。この所の

景色、筆にもおよび難しといへりへ  
わりとおほむ。爰にふですての松とて

巨勢の金固が筆を捨てんも、實にこと理  
こそかなおか覚筆捨

もつじかなこと

大樹あり。むかし、心越禪師この所に  
來り給ひて、わろいじの西湖のハ景に似たりとて、ハ景の名をばつけられし  
とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆  
今に残れり。堂のかたはびに三星といふ  
亭あり。そこより法師の出来て、ハけいの  
所々見よじて、遠めがねてふ物かしたり。

・てふ：といづ

・辰の刻：朝八時

・関：横浜市港南区関

・氣色：景色

此處の事は無論、其の前も後も、  
体に付いてゐる事は多分無いもの  
だ。一無事の出来事の類明るい様  
で、何處かの車庫で、漸く人情の  
やうなものが現れて、何處かの眼の  
底に現れるその出来事は、山社有り  
す。毎日機械を運んで、運転手の手  
裡寄る機械を運んで、運転手の手の手  
裡から現れるその出来事は、何處かの  
車庫で、何處かの車庫で、漸く人情の  
やうなものが現れて、何處かの眼の  
底に現れるその出来事は、山社有り  
す。毎日機械を運んで、運転手の手  
裡寄る機械を運んで、運転手の手の手  
裡から現れるその出来事は、何處かの  
車庫で、何處かの車庫で、漸く人情の  
やうなものが現れて、何處かの眼の  
底に現れるその出来事は、山社有り  
す。毎日機械を運んで、運転手の手  
裡寄る機械を運んで、運転手の手の手  
裡から現れるその出来事は、何處かの  
車庫で、何處かの車庫で、漸く人情の  
やうなものが現れて、何處かの眼の  
底に現れるその出来事は、山社有り  
す。

これにこたへ興をそへて、爰にじばし

休らひ、それより立出で、道すがり頬が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひことかや。まがりへて瀬戸橋の

かたほりなる東屋といへるに至りな。今宵の

わざりをこゝに定めし、さて器手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹せし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島のこなたにて、汐の干

がたにおりたち、近きあたうのわらは

見などろわらひ、拾いわらひのわらは

寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。

はや夕汐みち来べしとて、舟人のあわ

たゞしきりやぐゑへし、名残つきぞれど

舟にうつりぬ。彼わらはべ共に菓子など

あたへ、すな取舟にあみひかせつゝ、ともに

入江へかへる所の左りの方に、一覽亭

とて、ほかの山のつくなるにあがり見れば、

あいといすすぐれたる所のやが、筆にも詞にも

ひへし難し。南はほのかに安房・上

ふやの山々見渡され、浦賀の崎・かな島・

- かえゆせ：帰る時、帰り
- すな取：漁る

がけ

- 上つさ：上総のいと

の縄

廿日晴丈より度々の辰のあとの便  
との御事よりは、瀬戸四神も候。内侍方  
ニヤ一派は、頼朝公節徳、一派は、  
東を勤修。毎城天乃翁、一派は、  
西を政子、一派は、乃翁。唐、一派は、  
黒藏也。一派は、生徒を、また、金澤

ちゆうりぬる。一、南海の、おほくよが  
海今。一、山陰の、おもい、福島乃、高木  
の衆の、うそと、おこて、友平が、種原  
湖まで、瀬戸と、おこて、又えの、を、  
うち川、うし、久士の、おもい、か、  
けは、まし、ても、や、と、おこて、福島と、おこ  
く、不二の、底ふ、うと、たまつ、と、見  
人こす。せきの、おの、と、おこて、せきの、  
棹船、一、瀬戸お馬鹿、お角、お馬鹿、  
えを、お、お、お、お、お、お、お、お、  
瀬戸、湯の、町を、おこて、御、  
瓦屋、急が、お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、お、お、

鳥帽子えびしが島・夏つま、海面突堤に立つや出、

ひんがし北をのやめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた・野鳥・

洲わき・瀬戸を見おひし、又見かへれば、

内うち川より畠十のつり雲山のかにて、

向にたひくむやうもなし。詠歎せねど

口は不一の額にかくれ、たそがれ近しとて

人々のすゝむれば、この山をおりて、また舟に

棹わし、瀬戸の東屋に帰りな。此家の

高殿の遠田がね取出て遠近を

見ぬぐいすつりに、田も暮はてぬれば、

燈火てりし湯あみなどす。ぬいなべ縄もて

取得し魚など、壠のまへに物して持出し

たれば、日じるは好みなれど、畠ぬぐいし、

とかくしふりこりぬ。

• 物して：このじは「料  
理して」

### 第三回

廿日晴、夫々に支度と人のへ辰のじの頃に

このやぶつを出で、瀬戸明神に詣づ。この

みやしろは頼朝公勧請し給ふとかや。

またびは島弁財天の御やしづに詣づ。

此こは政子御前の勧請なりとも。蛇木と

いふ幾木ともなく生たてり。夫より金沢

• 金沢侯：六浦藩主